

中部の

エネルギーを 築いた人々

松永安左工門生誕150年記念企画展
「松永耳庵が伊豆堂ヶ島に建てた別荘」
～「孫が語る松永安左工門(耳庵)」
の講演より～

はじめに

松永安左工門は1934(昭和9)年、60歳を迎える頃から、茶道を趣味とし、論語の名言“60にして耳従う”から「耳庵」と号した。

また、同年、実子がいなかったため弟・英太郎の長男・安太郎と養子縁組をした。

1938(昭和13)年、視察のため訪れた西伊豆・堂ヶ島の海景が気に入り、購入を即決、1万坪はある土地を1,500円で買い、その後、「一日庵」「鬼童窟」「自炊庵」(いずれも現存しない)を構え別荘とした。

1939(昭和14)年、東邦電力倒産後、電気事業界から手を引き、1929(昭和4)年から造営した武蔵野柳瀬山荘で茶道三昧の生活に入った。当時三井財閥の益田孝(=号・鈍翁)横浜の生糸商の原富太郎(=号・三溪)と共に近代三大茶人と称された。

1946(昭和21)年、小田原に建てた「老櫓荘」(現在：小田原市郷土文化館分館松永記念館)に移り住んだ。そして柳瀬山荘は1948(昭和23)年、収集していた美術品と共に国立博物館に寄贈された。



松永記念館・松永安左工門生誕150年記念企画展の会場(老櫓荘)

耳庵生誕150年記念企画展 「松永耳庵が伊豆堂ヶ島に建てた別荘」

松永安左工門(耳庵)は1875(明治8)年に沓岐で生まれ、生誕150年の今年、松永記念館で「松永耳庵が建てた別荘」の記念企画展が開催(4月26日(土)～12月7日(日))されている。この関連イベントとして6月22日(日)、幼少期から約25年、堂ヶ島をはじめとした別荘などで耳庵と共に過ごした孫(=松永英二郎氏)が日常生活や日頃話題にしていたことなどについて語る講演会があった。



耳庵生誕150年記念企画展の案内チラシ

(1) 堂ヶ島に建てた別荘

堂ヶ島の別荘は、「一日庵」「鬼童窟」「自炊庵」から構成される。

「一日庵」は1939(昭和14)年8月に最初に立てた庵である。耳庵は「急にその岩山の頂上に一つ家がこしらえてみたくなった。それとも普通の造り方では面白くない。人々をあつと驚かせる方法で、一夜のうちに忽然と姿を現したら愉快だろうと思った。かつて秀吉が小田原攻めの際に驚くべき速さで築いた「一夜城」の向こうを張って「一日庵」と名付けた」と記した。

「自炊庵」は一日庵完成の翌日に出かけた南伊豆町子浦の魚師の家を気に入って移築したもので、長5畳の居間と6畳の寢室兼座敷などからなる9坪足らずの小屋であった。囲炉裏があり、ここで自炊するのを楽しみにして「自炊庵」と名付けた。

「鬼童窟」は自炊庵では波の音が高くて眠れないという妻の一言で建てられた。

グッチョウ氏が残した平面図によると、2階建て入母屋造^{いりもやづくりさんかむらびき}瓦葺(一部銅屋根で、1・2階とも座敷は8畳と6畳の2間続き)その両側に台所・茶室・浴室がある間取りであった。完成すると堂ヶ島を訪れた一行がここに寝泊まりし、お茶を点て来客の対応をする拠点とした。耳庵は堂ヶ島を「鬼でも住まいそうな島」と形容し「鬼童窟」と名付けた。後年、「電力の鬼」と呼ばれた頃、鬼童窟を描き、「案外弱いほとけ爺住む」と自らをユーモラスに描いた一幅が残っている。

(2) 堂ヶ島に建てた別荘での生活

堂ヶ島での生活を「鬼童窟の本家は東向きの朝日が強く、南国的に照りつけるので、朝飯をすますと書き物を風呂敷包みして一日庵に上る。七時半頃の涼風、紺碧の海の色、漁船の緩やかな動き、しばらくは縁側の藤椅子にもたれて遙かな雲見岬の三角錐を眺む。この雲見岬が同じような姿をしていながら朝な夕なに、その景色の変わるのも面白い。」と

記している。

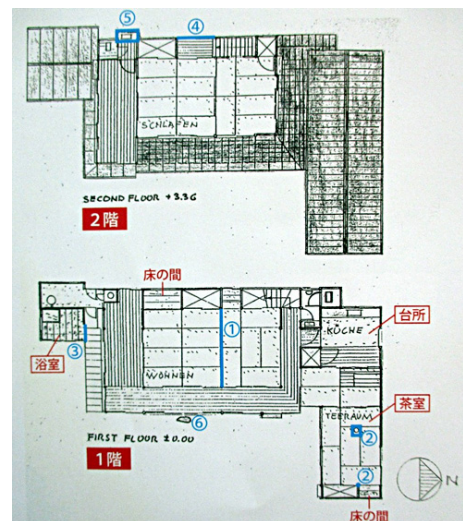
また、孫の英二郎氏は「私は兄・安一郎と三島から東海バスに乗り別荘に行った。当時、耳庵は運転手付きのリンカーンに乗り、でこぼこ道路で来ていた。6時半頃起床し、蚊帳、布団を片付け、朝食はパンと牛乳、昼食と夕食は魚とごはん、夜8時頃、ジョニーウオーカのお湯割りを飲み寝ていた。」と語っている。

(3) 鬼童窟の解体を手がけたドイツ人建築家

堂ヶ島に建てた別荘は1971(昭和46)年耳庵の死後も残されていたが、建築から半世紀が過ぎた頃、ドイツ人の建築家ヨルク・グッチョウ氏(Jörg Gutschow 1941~2021)が松崎町に



グッチョウ氏が解体時に撮影した「鬼童窟」
(出典・企画展で刊行された冊子)



グッチョウ氏が解体時に作成した「鬼童窟・平面図」
(出典・企画展で刊行された冊子)

居を定め、偶然堂ヶ島を訪れた際、鬼童窟と自炊庵の伝統的な建築に魅了され、このまま朽ちさせるのは惜しい、ぜひこの素晴らしい建物を大切にしたいと伝え、持ち主は喜び、解体してくれれば建物は差し上げるとの返答でした。彼はこの提案を受入れ、いずれふさわしい場所が見つければ再建を試みようと考えた。

この頃「一日庵」はすでに無く、「自炊庵」は傷みが激しく、グッチョウ氏による平面図、

内部の写真などは残されていない。

1989(平成元)年4月、グッチョウ氏は建物の解体作業に取りかかる前に「鬼童窟」の平面図を完成し、4ヶ月かけて一つ一つ丁寧に解体した。

その後、グッチョウ氏も亡くなり鬼童窟の再建は出来なかったが、①平面図、②解体作業中の記録写真(350枚程度)、③解体中に保管されていた建具類などの一部が2024年小田原市に寄贈された。

おわりに

電力の鬼・松永安左工門の年譜(参考資料1)、業績(参考資料2)について日本電気協会中部支部ホームページ「中部のエネルギーを築いた人々」に2012(平成24)年1月号より2013(平成25)年1月号まで7回、連載したので参考にされたい。

また、今回の資料作成に当たり、冊子「松永耳庵が伊豆堂ヶ島に建てた別荘(編集・発行：小田原市郷土文化館)」に掲載された文章や写真を参考にしたので、ここに厚くお礼申し上げます。

参考資料1：電力の鬼・松永安左工門の年譜（1875～1971）

西暦	年号	年齢	出来事
1875	明治 8	1	長崎県杵岐郡石田村に松永家の長男として誕生。幼名・亀之助
1882	明治15	8	石田小学校入学
1889	明治22	15	慶応義塾に入学
1893	明治26	19	父死去。帰郷して家業を継ぐ(呉服、酒造、海産)
1895	明治28	21	慶応に復学
1896	明治29	22	三田に寄宿舎に入舎、この頃より福沢桃介と経済論で議論。
1898	明治31	24	福沢諭吉の記念帳に「我が人生は闘争なり」と書く 福沢諭吉のすすめにより三井呉服店の就職試験を受ける
1899	明治32	25	福沢桃介のすすめにより日本銀行に就職
1900	明治33	26	日本銀行を退職し、福沢桃介と共に丸三商店神戸支店長に就任 丸三商店破産し閉店
1901	明治34	27	ゼネラルブローカー福松商会を設立、石炭販売事業で成功
1907	明治40	31	持ち株の大暴落により破産、自宅が火事で全焼
1908	明治41	32	広滝水力電気の監査役に就任 杵岐生まれから「一州」と号す
1909	明治42	33	福博電気軌道株式会社を設立(社長：福沢桃介、専務：松永安左工門)
1912	大正 1	36	九州電灯鉄道の取締役役に就任
1914	大正 3	38	西部合同ガスを設立、社長に就任(九州のガス会社10社を合併)
1917	大正 6	41	博多商工会議所会頭に就任 福岡市選出衆議院議員に当選
1921	大正10	45	関西電気副社長に就任

1922	大正11	46	関西電気は九州電灯鉄道を合併 関西電気は商号を東邦電力と変更、本社を東京に移転
1924	大正13	48	社団法人日本電気協会会長に選任
1928	昭和 3	52	東邦電力社長に就任
1934	昭和 9	58	「六十にして耳従う、七十にして矩のりを越えず」から耳庵と号す
1936	昭和11	60	中部共同火力㈱を設立、社長に就任
1937	昭和12	61	長崎商工会議所主催の座談会の席上「官吏は人間の屑だ」と発言
1938	昭和13	62	伊豆堂ヶ島の岩山を購入（翌年、一日庵を建てる）
1939	昭和14	63	電力界から手を引き、茶道三昧の生活に入る 武蔵野柳瀬山荘内に照月軒と自在軒を建てる
1940	昭和15	64	東邦電力取締役会長に就任
1942	昭和17	66	東邦電力の電気事業設備を日本発送電、各配電会社に出資し解散
1948	昭和23	73	柳瀬山荘を国立博物館に寄贈
1949	昭和24	74	電気事業再編成審議会委員に就任、第1回会合で委員長に就任
1950	昭和25	75	公益事業委員会が発足し、委員長代理に就任
1951	昭和26	76	電気事業再編成（9電力会社）の強行で“電力の鬼”と俗称される
1953	昭和28	78	財団法人電力中央研究所理事長に就任 アジア経済調査会を設立、議長に就任
1954	昭和29	79	天皇陛下堂ヶ島の一日常にお立寄り
1956	昭和31	81	「産業計画会議」を組織し委員長に就任
1963	昭和38	88	松永記念振興財団名誉会長に就任
1964	昭和39	89	勲一等瑞宝章授与・授賞式には欠席
1965	昭和40	89	産業計画会議第14次勧告「原子力政策の確立を希望する」発表
1968	昭和43	93	慶応義塾創立100周年記念式典で名誉博士号を授与
1971	昭和46	96	死去、本人の遺志により叙勲を辞退、葬儀・法名無

参考資料2：電力の鬼・松永安左工門の業績

（日本電気協会中部支部ホームページに連載）

1回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 慶應義塾から実業界へ～	2012(平成24)年 1月号
2回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 名古屋地方の施設改善と10年計画～	2012(平成24)年 3月号
3回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 茶道の始め～	2012(平成24)年 5月号
4回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 電気事業再編成・電力民営化の実現～	2012(平成24)年 7月号
5回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 独立自尊、生涯在野の松永哲学～	2012(平成24)年 9月号
6回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 松永安左工門の素顔に迫る～	2012(平成24)年11月号
7回：「わが人生は闘争なり」の松永安左工門－ 松永安左工門ゆかりの地～	2013(平成25)年 1月号

（寺沢 安正）